

平成30年3月9日（金）

【照会先】

横浜検疫所 総務課
（担当） 今別府 修
（電話） 045-201-4458

旧長濱検疫所一号停留所（厚生労働省横浜検疫所検疫資料館）の登録有形文化財（建造物）の登録について

平成30年3月9日（金）開催の文化審議会文化財分科会の審議を経て、「旧長濱検疫所一号停留所（厚生労働省横浜検疫所検疫資料館）」（※別紙参照）（神奈川県横浜市金沢区長浜107-8）が新たに以下のとおり登録有形文化財（建造物）（※注）として登録されるよう文部科学大臣に答申が行われましたので、お知らせいたします。

名称	所在地	建設年代	特徴等	種別	基準
旧長濱検疫所一号停留所 （厚生労働省横浜検疫所検疫資料館）	神奈川県横浜市	明治中期／大正後期改修	検疫対象者の旧宿泊施設。コの字形平面で、外観は下見板張りとは上下窓（あげさげまど）を基調に、両端突出部の先端にベイウインドウを設けて変化を付ける。横浜最古級の洋風建築として貴重な存在。	建築物 文化福祉	造形の規範となっているもの

（※注）

登録有形文化財（建造物）とは、原則として建設後50年を経過したもののうち、① 国土の歴史的景観に寄与しているもの、② 造形の規範となっているもの、③ 再現することが容易でないもの、を基準として登録されるものです。今後も資料館を活用し、検疫制度について幅広い周知を行うこととしています。

「旧長濱検疫所一号停留所（厚生労働省横浜検疫所検疫資料館）」について

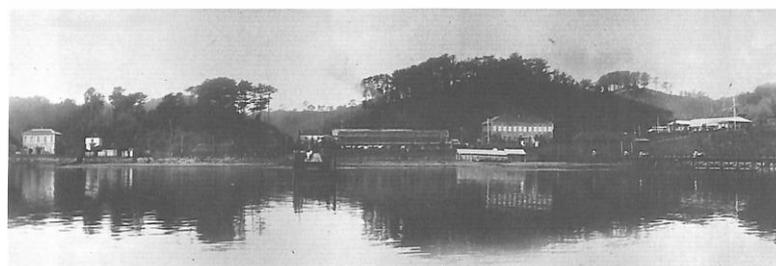
- ◆ 「旧長濱検疫所一号停留所（厚生労働省横浜検疫所検疫資料館）」とは、1877年（明治10年）以降に国内外で大流行したコレラの侵入や蔓延を防止するために明治政府が設置した長浦消毒所（現在の横須賀市長浦）が、「長濱検疫所」として1895年（明治28年）3月に現在の横浜市金沢区長浜に移転した際に設置された感染症の疑いのある者を一時的に停留させる施設です。



【外観(海側より撮影)】



【外観(西側より撮影)】



【創建された頃の長濱検疫所全景】

写真の右側の建物が一号停留所です。

- ◆ 停留施設ではありながら、当時の欧米列強にならい、上級の船客、船員等を収容する施設として、停留者に対するもてなしが施せるよう、天井のシャンデリアや装飾的な壁紙があるほか、食事一流の洋食を提供するなど、当時としては最も進んだ洋風施設でした。



【談話室】



【当時使用していた食器類】

- ◆ 明治 32 年 5 月には、野口英世が海港検疫医官補として採用され、折から入港した「アメリカ丸」の検疫において、中国人船員からペスト菌を検出し、国内への流入を防ぐなど、その後世界にはばたくきっかけとなりました。



【野口英世が細菌検査に
従事した細菌検査室】

※ 平成9年に横浜市に寄贈し、野口
記念公園内に復元されている。



検疫医官補時代の野口英世
[(公財)野口英世記念会所蔵]

- ◆ 建物内部には、当時の検疫において使用した器具や、与謝野鉄幹・晶子夫妻、後藤新平などの著名人が訪問した際に残した直筆の書などの貴重な歴史的資料が保管、展示されています。



【検疫に使用した検査機器】



【感染症患者等への診察器具】



【来所した著名人の短歌等】



【（伝）後藤新平の直筆の書】

※「薬学（医）の道は、智のとびらを開く世の中の人を守る筋道である」と解釈される。

横浜検疫所検疫資料館 (一号停留所)



検疫資料館を海側より撮影

横浜検疫所
Yokohama Quarantion Station



設置された頃の横浜検疫所(明治28年頃撮影)

横浜検疫所の歴史

明治時代、虎列刺(コレラ)が2年から3年間隔で蔓延し、多くの感染者と死亡者をだしました。特に、明治10年(1877年)は患者数5万人、死亡者数3万人、12年(1879年)には感染者が16万人、死亡者が10万人を超え、明治期最大の流行となります。11年(1878年)長崎から広がったコレラの流行を受け、明治政府はコレラの蔓延を防止するため横浜と神戸に消毒所を設置します。横浜に設置した消毒所が横浜検疫所の起源である「長浦消毒所」で、同年11月に神奈川県三浦郡長浦村(現在の横須賀市長浦)に完成します。さらに明治政府は12年に「海港虎列刺病伝染予防規則」を公布しコレラ蔓延に努めます。その後、日清戦争による横須賀軍港拡張のため、明治28年(1895年)3月に神奈川県久良岐郡金沢村大字柴(現在の横浜市金沢区長浜)へ移設し、翌年の内務省告示により「長濱検疫所」と呼称。以後、内務省直轄から神奈川県港湾部、税関等の管轄を経て、昭和22年(1947年)から厚生省(現、厚生労働省)の所管となり、現在の「横浜検疫所」に至っています。

この間の明治32年(1899年)6月には、海港検疫医官補として当検疫所に採用された野口英世が、折から入港した「亜米利加丸」(アメリカ丸)の検疫に従事して中国人船員からペスト菌を検出し、野口の名を一躍伝染病関係の医師や海港検疫医の間に知らしめました。

また、大正12年(1923年)9月の関東大震災では、検疫所の施設も倒壊などしましたが、倒壊前の器材を一部使用するなどして、翌年、倒壊前のすべての施設を原形のように復旧しました。

おもな出来事

- 明治11(1878)年11月 長浦消毒所を設置
- 12(1879)年 7月 海港虎列刺病伝染予防規則公布
- 明治28(1895)年 3月 長濱消毒所に移転。翌年「長濱検疫所」と呼称。
- 明治32(1899)年 2月 海港検疫法公布
- 5月 野口英世、海港検疫医官補として勤務
- 明治35(1902)年 3月 港務部設置公布
- 大正12(1923)年 9月 関東大震災により倒壊等した施設を改築等する(～大正13年)
- 大正13(1924)年12月 税関官制改正公布
- 昭和 4(1929)年 5月 検疫所内で短歌小集会が開かれ、与謝野寛・晶子夫妻、平野万里ら10名が来所
- 昭和16(1941)年12月 海務局官制公布
- 昭和18(1943)年11月 海運局官制公布
- 昭和22(1947)年 4月 検疫所官制公布により厚生省所管となり「横浜検疫所」に名称変更
- 5月 引揚援護事務を行う横浜援護所を所内に設置(～昭和30年)
- 昭和27(1952)年 8月 横浜検疫所庁舎移転(横浜市中区海岸通)～旧庁舎は「長浜措置場」として存続～
- 昭和43(1968)年から 長浜措置場の地先海面1.5kmほど埋立てられる
- 昭和48(1973)年10月 横浜第二港湾合同庁舎竣工
- 昭和57(1982)年10月 組織再編により検疫所において輸入食品の検査を開始
- 昭和61(1986)年 3月 長浜措置場施設新築 ～一号停留所は「検疫資料館」として存続～
- 平成 3(1991)年10月 横浜検疫所輸入食品・検疫検査センター設置
- 平成 5(1993)年 2月 野口英世ゆかりの細菌検査室を横浜市へ払下げ
- 平成 9(1997)年 2月 輸入食品中央情報管理官設置
- 平成13(2001)年 1月 中央省庁再編により厚生省から厚生労働省となる
- 平成26(2014)年 2月 ISO/IEC 17025 認定機関より試験所認定を受ける(毎年更新審査を受審)
- 平成30(2018)年 3月 旧長濱検疫所一号停留所(検疫資料館)を文化審議会が登録有形文化財(建造物)への答申



野口英世が細菌検査に従事した
細菌検査室



検疫医官補時代の野口英世
〔(公財)野口英世記念会所蔵〕



平成9年(1997年)5月にオープンした野口記念公園内に復元された細菌検査室

野口が細菌検査室に従事した
建物で現存する唯一の建物です

野口英世の生涯

- | | |
|-------------------|----------------------------------|
| 明治 9(1876)年11月 9日 | 福島県猪苗代町の農家の長男として誕生 |
| 明治29(1896)年 | 上京し、わずか20歳で医師の資格を得る |
| 明治32(1899)年 5月 | 横浜海港検疫所に検疫医官補として勤務 |
| 明治32(1899)年10月 | 清国のペスト対策のため国際防疫班に選ばれ渡清 |
| 明治33(1900)年12月 | 横浜より渡米 |
| 明治44(1911)年 | 梅毒スピロヘータの純粋培養に成功 |
| 大正 7(1918)年 | エクアドルで黄熱病原体を発見 |
| 昭和 2(1927)年10月 | アフリカへ黄熱病研究のため出張 |
| 昭和 3(1928)年 5月21日 | 西アフリカ・アクラで黄熱病研究中に黄熱病に罹り殉職(享年51歳) |



横浜検疫所 検疫資料館

- 所在地:横浜市金沢区長浜107-8
- 京浜急行……………能見台駅より徒歩約15分
 - 横浜新都市交通線(シーサイドライン)
……………幸浦駅より徒歩約15分
 - JR新杉田駅前から横浜市営バス294系統
……………なぎさ団地前下車 徒歩約10分

お問合せ先:横浜検疫所総務課
横浜市中央区海岸通1-1
(横浜第二港湾合同庁舎)
TEL 045-201-4458 / Fax 045-201-3302



検疫資料館を山側より撮影



明治の面影を残す

「一号停留所」

横浜検疫所

一号停留所とは

- 一号停留所は上等船客用の停留施設として、明治28年(1895年)3月に完成しました。
- 当時は、東京湾を見下ろす高台にあり、前方には広い芝庭が広がっていました。
- 建物は、ほぼ東西に長く、南面の両端が突出したコの字型で左右対称となっています。
- 所内には8つの部屋(一室2人用)と食堂及び談話室があり、感染症の疑いがある方々が一定期間滞在していました(建坪は127.25坪(約420㎡))。
- 現在は、検疫資料館として検疫業務等に使用した資料の展示を行っています。

『参考』

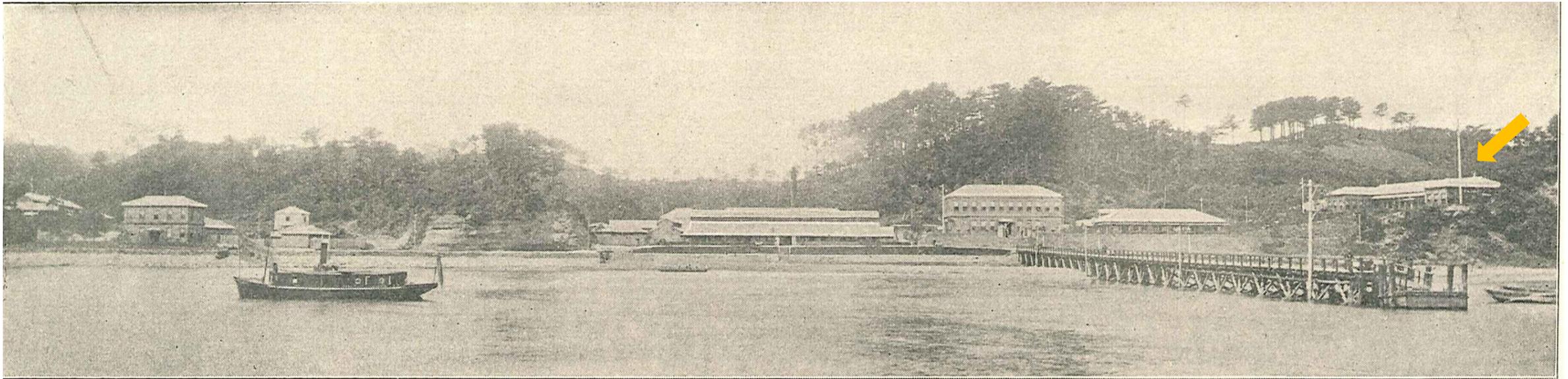
吉田鋼市横浜国立大学名誉教授

「一号停留所」の歴史的価値について(平成27年 抜粋)

- 長濱検疫所は、日本最初の検疫施設である長浦消毒所を引き継いだ日本の検疫施設最古の遺構の一つであり、その日本の検疫史上に占める位置は甚だ大きい。
- 検疫資料館(一号停留所)は、長濱検疫所のなかで最も建築意匠的に重要な施設であり、長濱検疫所の建築の粋がこの建物に収斂して残されており、それはまた、富士屋ホテルや日光金谷ホテルや奈良ホテルと並んで日本の洋風ホテルの最初期の遺構とも目されるものである。
- それらが和風意匠を主眼としたホテルであるのに対して、横浜検疫所の検疫資料館の建物はまったくの洋風であり、純粋に洋風の最初期のホテル遺構に類するものとして、建築史上に占める価値は大きい。

平成30年2月5日 海側より撮影

明治28(1895)年完成時の長濱検疫所



長 濱 検 疫 所 全 景

出典: 学校法人北里研究所蔵細菌学雑誌
(明治29年11月号巻末)

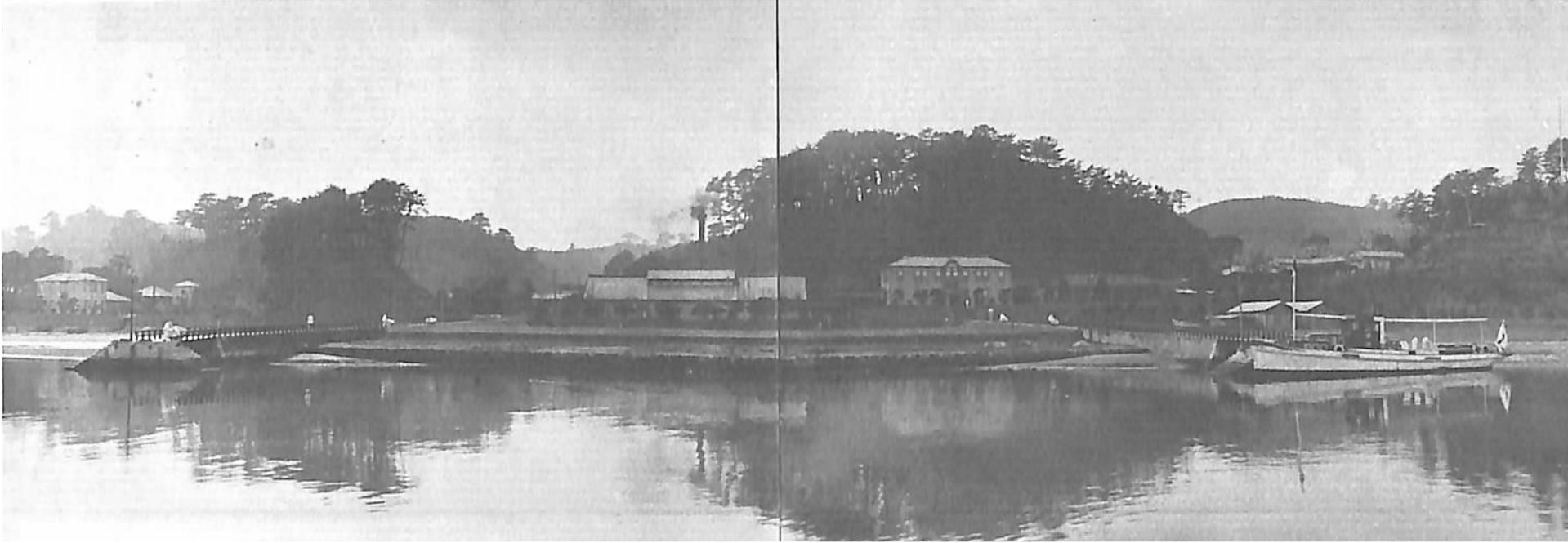
海上から見た長濱検疫所です。左側から伝染病院(屋根)、伝染病院事務所、官舎、人夫及び船員附属賄所。山を挟んで納屋、倉庫、二号浴室(下等船客用)、検疫所事務所、一号浴室(上等船客用)が見えます。また、海上には患者消毒人等送迎の伝馬船と思われる船と検疫所事務所の前には既消毒者用の棧橋が、「一号停留所」は写真の一番右側(矢印)に見えます。

参考:「上等船客」は当時の旅客船賃「一等・二等」などの利用者、「下等船客」とは旅客船賃「三等」などの利用者です。

長濱検疫所は完成後、明治28年4月10日に金州(現在の中国遼寧省大連市)及び澎湖島地方(現在の台湾)においてコレラが流行したため、内務省より流行地域からの船舶に対して横浜港に航行する船舶に対して検査が求められ対応したのが最初です(同年4月10日内務省告示第54号)。同年7月30日「台湾及び朝鮮国諸港」(内務省告示第97号)も検疫の対象になり同年12月17日まで続きました(同年12月16日内務省告示第151号)。

明治32年(1899年)5月までは必要に応じて開閉所していました。

関東大震災後の長濱検疫所と一号停留所



震災に伴う復旧工事後の写真です。
写真中央左の二号浴室は震災前より約30坪建坪が減少しています。
また、検疫所事務室は屋根や壁等が震災前と異なる造になっています。
さらに、将来停留所等の拡張の用に供するため二号浴室と検疫所事務所前の海岸、約3,000坪を埋立造成しました。

大正12年(1923年)9月1日南関東を中心に死者10万人を超える関東大災害が発生しました。この震災によって長濱検疫所の施設等は倒壊などしました。復旧工事等が開始され、翌年、大正13年(1924年)には全部の施設が原形のように復元されました。また、災害後、9月4日には検疫業務を行っています。

一号停留所の被害状況は「大正12年9月1日 震災被害調査表控」(長濱検疫所)によれば、「小傾斜破壊 修理可能なもの」とあり、大正13年(1924年)6月4日起案「長濱検疫所一号停留所其他復旧工事設計書」によれば、「一号停留所改築」と書かれています。古材等も使用したようです。復旧工事は同年6月23日に契約を交わし、同年10月10日に「竣功届」が請負人から神奈川県知事に提出されています。

また、検疫所事務所を見ると「大正12年9月1日震災被害調査表控」では「傾斜 大破壊」とあり、大正13年2月25日起案には「長濱検疫所事務所其他新改築工事設計書」(事務所を事務室と表現)とあり「新築」であったことが推察され、検疫所事務所の写真を震災前と比較すれば、窓の数や正面2階に葡萄模様の花飾りの「ペディメント」を設けるなど、その変化がおわかりいただけると思います。

一号停留所は、昭和61年(1986年)より「検疫資料館」として存続し、明治の面影を伝えています。



「ペディメント」

関東大震災後の一号停留所の内部(1)

食堂



開設当時は、専任の
コックを雇い停留者に料理等を提供していたようです。

関東大震災後の一号停留所の内部(2)

談話室



停留期間中、大正から昭和初期にかけて、和洋のレコードを聴いていただくなどして停留者の気持ちをほぐしていたようです。

関東大震災後の一号停留所の内部(3)

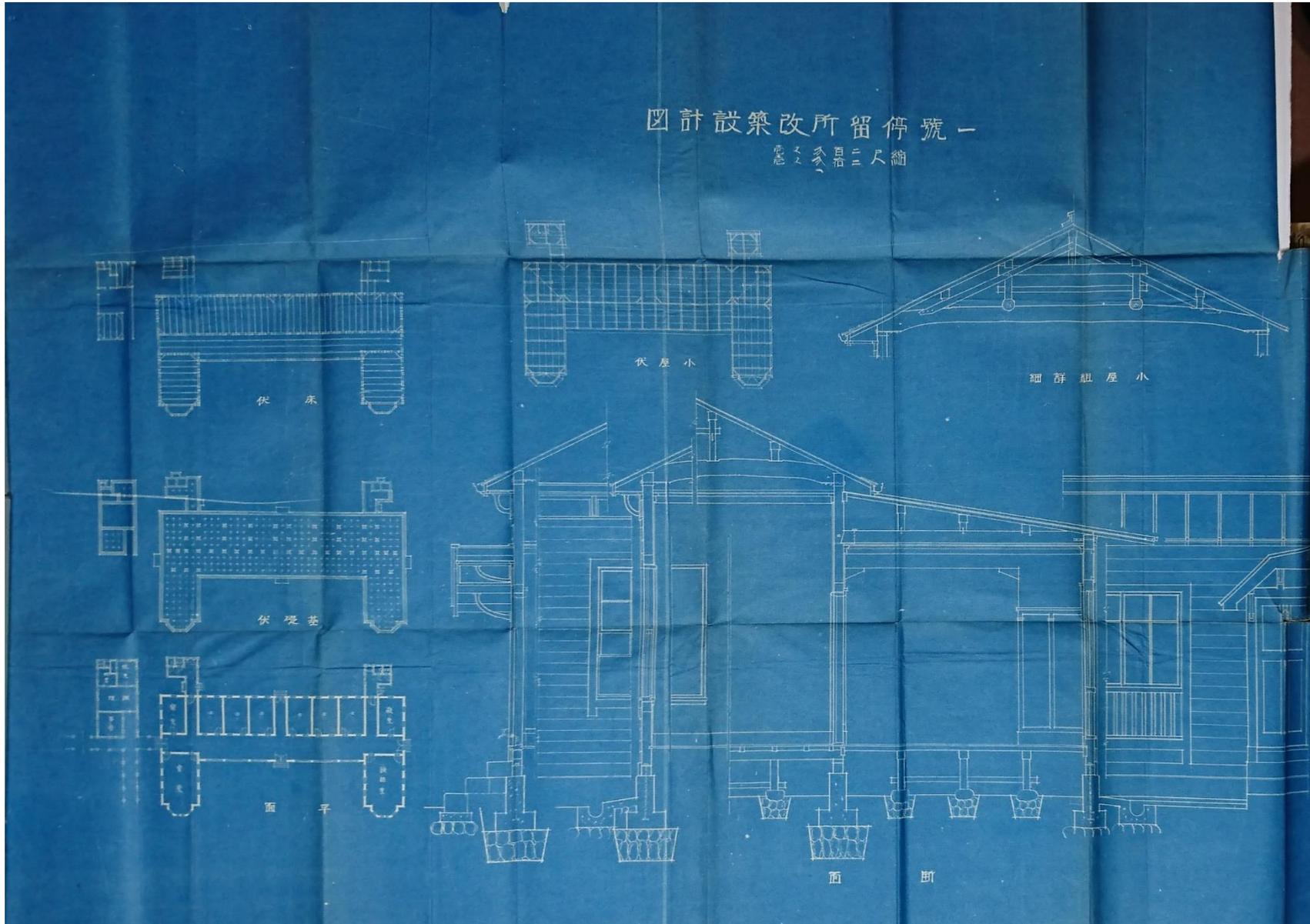
廊下



廊下の左側が海側です。

また、廊下の右側が居室です。

関東大震災復旧工事の一号停留所改築の図面(1)



関東大震災復旧工事の際に作られた設計図です。

右上は小屋組の詳細図、中央上は小屋伏図、左上は床伏図、左中は基礎伏図、左下は平面図、中央は食堂の南北方向の断面図です。

関東大震災復旧工事の一号停留所改築の図面(2)



関東大震災復旧工事の際に作られた設計図です。

右上が停留所全体の平面図、右下が南北方向の断面図です。

外側には出窓が設けられました。

壁に取り付けられた窓の内側には両開き式のカーテンがあり、丈はカーテンレールから床上まであります。

食堂の写真にカーテンが見られます。

昭和28(1953)年の一号停留所

停留者は、晴れた日には芝や多行松などが茂る庭を散歩したり、防波堤や東京湾を眺めたりしていたようです。
一号停留所の外壁が「白色」になったのは戦後、GHQが接收していた際に米軍が白ペンキを塗ってから続いています。
また、昭和22年(1947年)5月から昭和30年(1955年)7月まで海外引揚者等の宿泊施設としても使用していました。



海側より撮影

庭に芝や多行松などが茂っていました。

防波堤の先に東京湾が広がっており帆船などが見えます。



山側(一号停留所)より撮影

昭和28(1953)年の一号停留所の内部



食堂

寝室

廊下



昭和46(1971)年の一号停留所



海側より撮影



山側より撮影

昭和59(1984)年と平成6(1994)年の一号停留所



海側より撮影(昭和59年)



海側より撮影(平成6年)

一号停留所の全景



平成30年1月18日 海側より撮影

雪をかぶった一号停留所



平成30年1月23日 海側より撮影

参考文献

検疫制度百年史(厚生省公衆衛生局)

検疫制度100周年記念誌(昭和54年7月(財)日本検疫衛生協会)

「一号停留所」の歴史的価値について(平成27年 横浜検疫所)

細菌学雑誌(明治29年11月号巻末)(学校法人北里研究所所蔵)

大正12年～昭和2年営繕管理課(神奈川県立公文書館所蔵)

横浜検疫所長浜措置場建築調査記録(1986年3月建設省関東地方建設局営繕課)